

三澤勝衛の記録 科学的評価の背景

観測密度が濃く 原本など一式現存

約100年前、太陽の黒点観測を行った三澤勝衛（1885～1937年）の観測記録が国際的な科学の目で評価されたことが大きな要因にあった。

背景には、月25日を超える観測の密度の濃さと、記録の原本、観測時の付帯データがそろっている



諏訪清陵高校同窓会と同校が管理する「三澤勝衛先生記念文庫」で大切に守る三澤の観測記録

保存と活動継承 清陵生らも喜び

た。長年にわたり師の記録の保存と観測活動を受け継いできた諏訪清陵高校（諏訪市）の生徒、教職員の努力が実を結び、地元関係者にも喜びが広がっている。

三澤の観測記録は遺

族からの寄贈で、同校同窓会が「三澤勝衛先生記念文庫」を創設した。1965年に施設を建てて運営、同校の生徒有志と教員が除湿や暖房、清掃など日常の管理をしている。

同校天文部顧問で文庫管理を担当する山本淳一理科教諭は「継続の大切さと伝統をつなぐ重みを改めて感じている」とかみしめ、「情報が埋もれがちでデジタル社会の中でこそ自らの手で書き、紙に残す大切さを生徒たちに実感してもらえたら」と期待を込める。

同校と、「長野県は宇宙県」連絡協議会の取り組みを下支えする茅野市八ヶ岳総合博物館の渡辺真由子学芸員も「三澤先生の業績が天文学会でも評価されてうれしい。学生、卒業生が思いをつないでいるからこそその成果。記録、資料を残すことの重要性和意義を次代につなぐ再確認の機会になれば」と話していた。

（日比野真由美）